



蘇る、蒲生の自然

蒲生干潟と海浜

10月号

静寂な蒲生干潟と海浜

(9月中旬の蒲生)



かすかに波音だけが聞こえます。



最近、バードウォッチングや植物・生き物観察、更に、七北田川河口での釣りを楽しむ人達が多くなりました。また、干潟の調査をする専門家の皆さんも見かけます。



アシ原の前の茎丈が低い枯れた植物



9月3日に蒲生干潟を訪れた時に初めて気づきました。ヨシ原の前に茎丈が低い植物が枯れていました。茎の高さと枯れる時期から考えると、この植物はヨシではないようです。科学館に問い合わせると、穂が付いていないので確証はできませんが、葉が細いことと、ヨシと一緒に群生していることを総合的に判断してシオクグだと思われるとのことでした。

干 潟 で カ ニ 捕 り

9月23日、快晴の秋分の日。家族でたくさんの方が蒲生干潟へ遊びに来ていました。綺麗な青と緑の中で、子どもたちはカニ捕りに夢中です。

白鷺も干潟の奥地で羽を休めています。羽数から、こちらも家族づれのようなようです。



海浜の広い範囲に震災前から生えていた海浜植物の**ハマニガナ**が群生していました。

ハマニガナの群落



ウンランの群落



海浜に打ち寄せられた流木の中に震災前から生えていた海浜植物の**ウンラン**が群生していました。



ブタナ



こちらは、科学館に問い合わせると、**ブタナ**という植物だそうです。ヨーロッパ原産の帰化植物で、日本各地に分布しているそうです。花茎が途中で数本に枝分かれし、それぞれの頭に直径3 cmほどの黄色い花をつけます。タンポポに似ているので**タンポポモドキ**という別名もあります。



WEB画像

8月号の資料の訂正です。

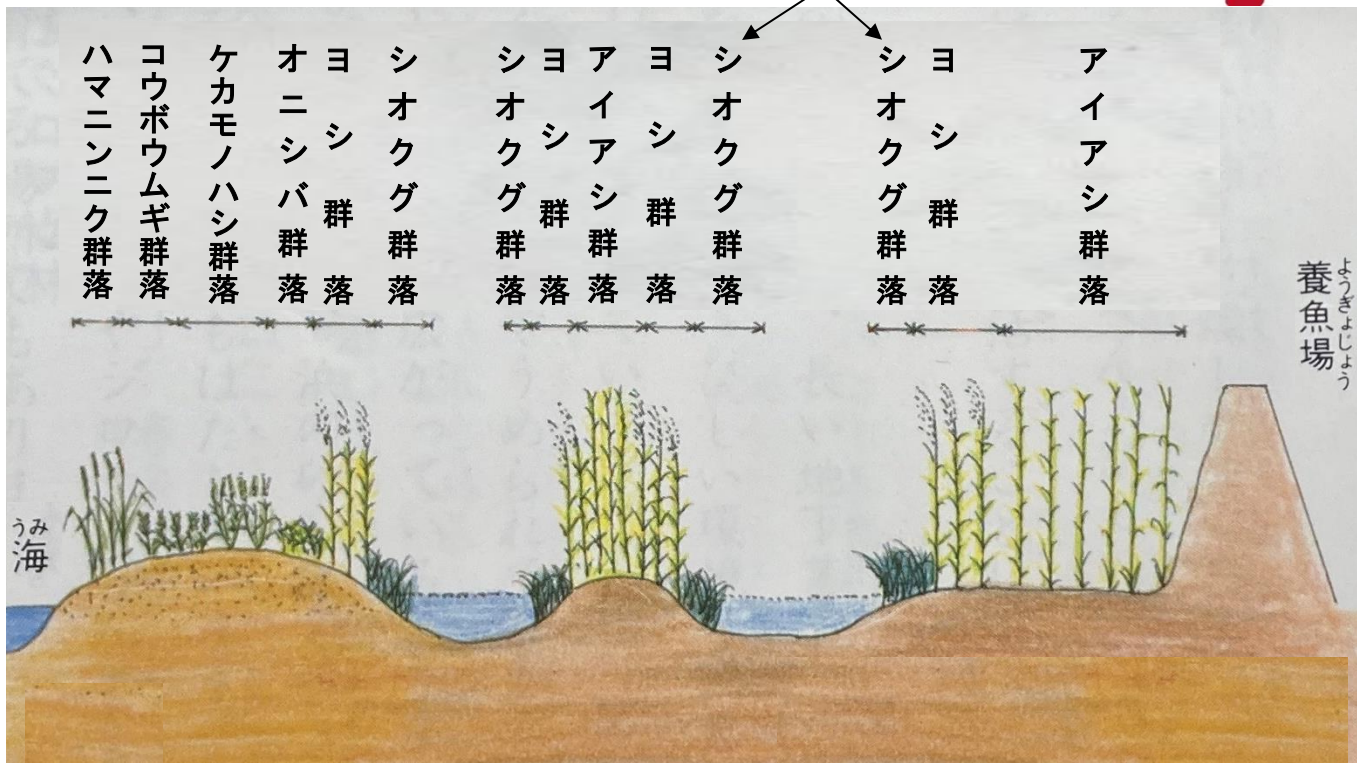


科学館より、ヨシと一緒に群生しているのはシオクグと思われると回答がありました。「ハママツナでは？」は削除します。

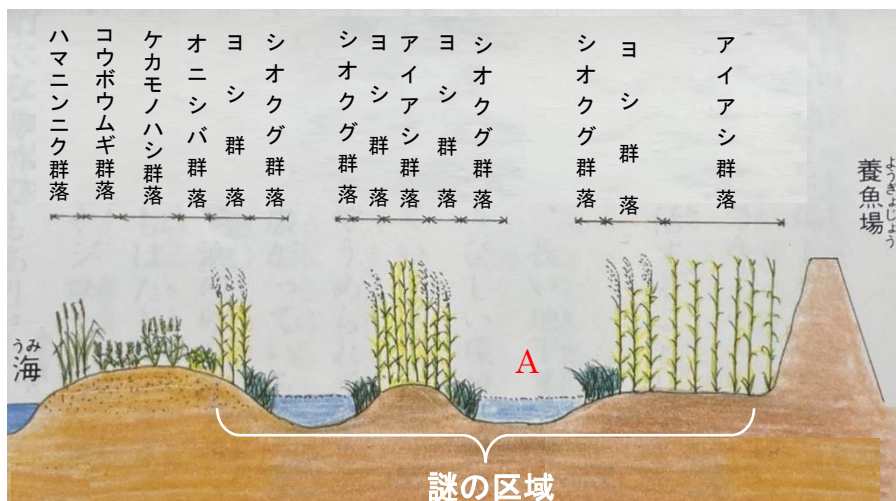
ハママツナでは？



蒲生海岸の植物の分布図（1980年代頃）



上の植物分布図は1980年代の頃の資料です。蒲生海岸に生えている植物の種類は、おおむね変わらないと思われませんが、1980年から震災までの30年間、及び震災後の10年間には、地形（干潟の形状）の変化もあったものと思われまます。それによる植物の分布に、変化は起きなかったのでしょうか。特に震災後は、理由は定かではありませんが帰化植物も生えてきたようです。また、上の植物分布図には無いハママツナが大変広い範囲にわたって群生しているのには驚かされます。



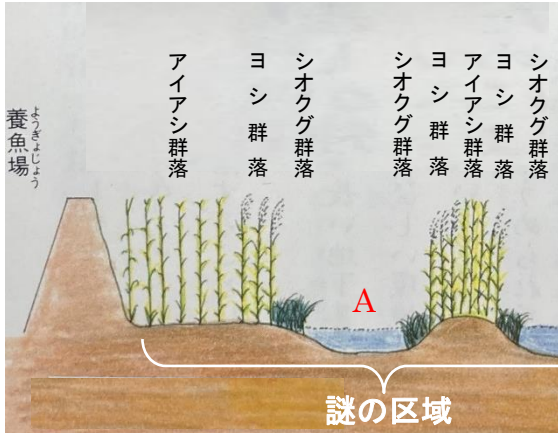
これまでの観察で、図に示した区域が謎となるようです。津波で、その地形と植生に変化が起きたのでは？



次ページの定点写真を見ると・・・

定点写真は語る～震災前と震災後の植生の変化～

今年以外の定点写真は、
蒲生を守る会発行の「蒲生干潟の現在」より



震災前は、ハママツナは生えて
いなかったようです。



アシの群落地にハママツナが



ハママツナの群落地にアシが！



長年、蒲生干潟の観察している方に尋ねてみました。
「震災前も、ハママツナは、このように広い範囲に生えていましたか？」



震災前は、ハママツナは生えていませんでした。この辺一帯はアシがほとんどでした。津波によって環境が一変して、ハママツナが生えるようになりました。理由は分かりません。しかし、最近ではアシも生えてきています。何年かかるか分かりませんが、ゆくゆくは元のようなアシ原になると思います。



謎の区域の謎が解けたようです！
植物群落が時間とともに一定の方向性をもって変化していく「遷移」の現象のようです。陸地のように、この海浜でも遷移が起きていたようです。

不思議な植物の分布



オカヒジキの群落 (8/20)



オニハマダイコンの群落 (7/24)



オカヒジキ (8月)



オニハマダイコン (6月)



オニハマダイコン (8月)

写真でも分かるように、オカヒジキの群落のすぐ隣にオカヒジキの群落が見えます。どちらも海浜植物です。



違いは、オカヒジキは日本及び朝鮮、東アジアに分布していて柔らかい砂地に、オニハマダイコンは北米原産の帰化植物で砂礫地に生えていました???

この2つは、元々ここに生えていたのでしょうか？

この2つの植物が

- ① 震災前から生えていたのか、震災後から生えるようになったのか。
 - ② 震災後に生えるようになったのであれば、それはどのようにしてか。
- については、震災前の生育状況の把握ができていなので分かりません。



チュウサギのコロニー (9/13)



ゴイサギのコロニー (9/13)



8月27日の生息数は、チュウサギは30羽ほど、ゴイサギは0羽でした。9月13日は共に1羽も生息していませんでした。

どちらも繁殖地は、キリンビール仙台工場の敷地林ということになります。どこへ移動したのでしょうか。



先月の質問では、このチュウサギは漂鳥でしょうとの回答でした。ゴイサギも、先月からコロニーに1羽もいなくなりました。ゴイサギもチュウサギと同じく漂鳥なのでしょうか？

ゴイサギは、図鑑によると漂鳥にも留鳥にもなる鳥です。特に寒い地域（北日本など）では冬場は東南アジアの方に移動するようです。日本の中でも南の方では、留鳥として移動せずに生活をしているようです。

宮城県ではおそらく漂鳥なのかもしれません。夏場が繁殖期のようなので、繁殖地にしばらく滞在後移動するかもしれません。明確にお答えできずすみません。



野鳥には、留鳥や漂鳥、渡り鳥（夏鳥、冬鳥）や旅鳥など多く種類があります。名前と生息地を覚えるだけでも大変です。しかし蒲生干潟で野鳥観察すると、少しずつ分かってきます。

夏鳥ではコアジサシやオオヨシキリ、旅鳥では5月にチドリやシギの仲間の観察ができました。まもなくその旅鳥は、越冬地に向かうために再び干潟に立ち寄ります。冬鳥では国の天然記念物に指定されているコクガンが飛来するそうです。



タンポポによく似た植物



ハチジョウナ



こちらは、科学館に問い合わせると、ハチジョウナと思われるキク科の植物だそうです。海浜植物ではありませんが、海辺に近い原野に生えるそうです。



ブタナ



ハチジョウナとブタナは同じキク科の植物で、タンポポのような黄色い花を咲かせます。違いは、葉のつき方です。ブタナはタンポポのように地面を這うように葉が広がっていますが、ハチジョウナは茎についています。



このエリアは、海浜植物と普通の野草が入り交じっているエリアです。

季節毎に様々な花が見られるので大変興味深いです。

春から初秋にかけての蒲生の自然を見てきました。一時は復元不能と言われてきましたが、次々と新しい生命の誕生を見ることができました。驚きです。次回からは、秋から冬にかけての蒲生の自然の様子をお届けします。

